



東京多摩プロバスニュース

第 63 号

■事務局: 〒206-0034 東京都多摩市鶴牧 5-29-10 平田方 ■編集・発行: 広報委員会 2015. 11. 4.

■電話・FAX (042) 338-7022 ■URL: <http://www.tokyo-tama-probusclub.com>

ふるさと多摩を若い人たちと共に

第 135 回 定例会

日 時 : 平成 27 年 9 月 2 日(水)午後 1 時 30 分より

場 所 : 関戸公民館第 2 学習室

出席者 : 25 名(会員数 32 名)

第 136 回 定例会

日 時 : 平成 27 年 10 月 7 日(水)午後 1 時 30 分より

場 所 : 関戸公民館第 2 学習室

出席者 : 24 名(会員数 32 名)

理 念

1. 豊かな人生経験を生かし地域社会に奉仕する
2. 活力ある高齢社会を創造する
3. 会員同士の交流と意欲の向上をはかる
4. 非政治的、非宗教的、非営利的であることとする



ごあいさつ



「やらまいか」

中野区に育った私にとって、自然に恵まれた「多摩地区」は、聖蹟記念館・多摩川・平山城址公園・野猿峠・高尾山などレクリエーションや遠足の地であった。

結婚を機に、多摩に住む家内の両親の近くにと中河原のマンションに、九州・名古屋への転勤を経て、聖蹟桜ヶ丘に定住して早や 25 年余が経ちました。

ただ多摩市の最北端に住んでいるため、現役時代の休日という出掛ける地域は、府中や新宿の京王沿線や多摩川沿いが多く、残念ながらニュータウンや市の南部については殆ど足を踏み入れる機会は少なかった。せいぜいパルテノン多摩にコンサートを聴きに行ったり、プロ野球のイースタンリーグを見に一本杉球場に行ったこと、定年後には初めて、男性茶道教室「佐助」の野点で川井家の枝垂れ桜を知ったことくらいでした。

プロバスクラブに入会して、会員各位の多様な市民活動をされている様子に感心し、「プロバスニュース」トップページの写真を通じて地元の自然の素晴らしさを教えてもらっています。

特に多摩かるたの作成過程では、知らなかった名所・旧跡がいかにも多いか、モミジバフウの並木、よこやまの道など数え上げたらきりがりません。

また母親の介護を通じて、地域包括支援センターやデイケアセンターの世話にもなり、改めて高齢者にも優しい町かなと感じ始めています。

子供がいないので実感はありませんが、若いも若きも生き生きと暮らせる「健幸都市」になりつつあるかなと思います。

微力ながら「若い人たちと共に〇〇するふるさと多摩」を実現するべく、裏方としてやらまいか精神で活動しようと思う。

鈴木泰弘総務委員長



丘巻な紅葉のモミジバフウ並木
多摩市上之根通り

◇◇◇ 幹事・委員会報告 ◇◇◇

1. 幹事報告

稲田興幹事

1.1. 理事会での決議事項

1) 第二回プロバスフェアの開催

全員参加で行うが、澤会員を実行委員長として委員会を発足させ、来年1~3月の間に開催。

2) カルタ普及プロジェクトの解散

右欄3項参照

1.2. 他プロバスとの交流

1) 9月26日(土)日野PC5周年記念事業「愛のサウンドフェスティバル」に参加(ひの煉瓦ホール)。

2) 10月18日(日)八王子PC20周年記念式典(京王プラザホテル八王子)に会長以下5名参加(総勢167名 来賓103名)。記念事業「宇宙展」(サザンスカイタワー)も見学。

2. 委員会報告

2.1. 総務委員会

鈴木泰弘委員長

1) 第135回 定例会 9月2日(水)卓話「ペルシア淵源のアクア文化伝播ロードを訪ねて」

高村弘毅会員

関連記事P3参照

2) 第136回 定例会 10月7日(水)卓話「TVが新聞を超えた日“ニュース革命はこうして始まった”」

澤雄二会員

関連記事P4参照

3) 今後の定例会設定 開催時間はいずれも13:30~16:00
・第137回定例会 11月4日(水) 関戸公民館 第2学習室
・第138回定例会 12月2日(水) 関戸公民館 第1学習室

4) 現会員数32名 内休会2名、会友10名



総務委員会の皆さん

左から岡野、鈴木、倉賀野、大澤、瀬尾各会員

2.2. 研修・親睦委員会

鈴木達夫委員長

1) 9月26日(土)聖蹟桜が丘周辺まち歩き(主催:多摩市経済観光課)に会員7名参加。桜ヶ丘周辺の史跡を見学。

2) 10月14日(水)研修旅行(鉄道博物館・川越)参加者16名 鉄道に関する歴史、技術、仕組みや喜多院(川越大師)・蔵造りの名所旧跡などを見学。 関連記事P4参照

3) 11月20日(金)多摩動物園散策を計画中。

4) 12月2日(水)京王クラブにて忘年会開催予定。

2.3. 地域奉仕委員会

澤雄二委員長

1) 9月24日(木)多摩第二小学校で蓮池守一會友による出前授業実施。 関連記事P5参照

2) 11月定例会時の講話を明星大学西浦定継教授に依頼、テーマは「多摩の輝く未来」。

2.4. 広報委員会

北村克彦委員長

1) プロバスニュース第63号を11月4日(水)に発行。読んで面白い内容、会員の活動をより多く伝えられるよう配慮して、今号は8頁編成とした。

2) ホームページの更新を11月20日(金)に予定している。

3. かるた普及プロジェクト

大澤亘リーダー

かるた普及プロジェクトは10月3日(土)氷山公民館ベルブホールで行われたNPO多摩ニュータウン・まちづくり専門家会議の創立10周年記念企画によるかるた展示を以って予定の行事を終了したので、9月30日の理事会でこれを解散することが決定され、地域奉仕に引き継がれた。

この1年間を振り返ると、学校関係でのかるた利用については一部の学校を除いてなお働きかけが必要であるが、各地域のコミュニティセンターやサロンなど市民グループの間では秋祭りや文化祭などの行事を通して徐々にその利用が広がっている。かるたの普及には引き続き時間をかけて努力を重ねる必要があると考えます。

◇◇◇ 三分間スピーチ ◇◇◇

1. モノクロからカラー写真へ

堀内陽二会員

今からおよそ200年前の1800年代に光と色の三原色理論が確立された。それを基に数々の研究の結果1935年(昭和10年)アメリカのイーストマン・コダック社により、当時画期的な天然色フィルム(商品名コダクローム)が発売された。その後ドイツや日本でも次々とカラーフィルムが発売され、カラー写真は急速に発展していった。

同一フィルムベースに3種の乳液材が塗布され、フィルム内部で入射光が自動的に3色分解され発色現象なるもので見事なカラー写真が出来上がる。

この様なカラー業界に縁あって、昭和30年頃より約50年間関わった。今はすっかりデジタル写真時代。結果としてカラーフィルム全盛時代に居合わせたこと感無量!!

2. コンチネンタル・タンゴ“アルフレッド・ハウゼ・オーケストラ来日演奏会”

村上伸茲会員

9月26日神奈川県民ホールで開催された演奏会を家族で聴きに行ってきました。聴衆は約2500人、皆、私と同じハウゼファンのように、中・高年カップル・中・高年女性グループが大半でした。今回は初来日より50年目、ハウゼが亡くなって10年目の節目にあたりますが、私は来日3回目より欠かさずこれを聴きにいらしています。

指揮者はジャック・パウエル氏で、ハウゼの演奏文化を完全に引き継いでいます。演奏はアンコールを含め30曲、心地よいタンゴのリズムと流麗なストリングスに魅了されました。ハウゼが残した遺産は生きています。

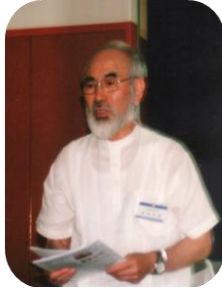
皆さんと共に次回の来日を期待しましょう。

「ペルシア淵源のアクア文化(カナート)

伝播ロードを訪ねて」

高村弘毅会員

地理学に「処変われば品変わる」という諺があります。異なる地域にはその土地にあった風俗・習慣・文化が存在するということであります。しかし、文化の発生は、類似した環境であれば異なる場所で類似した文化が発生することがあれば、一か所で発生した文化が他地域に伝承、拡散して定着するという多源発生文化と、単源発生文化の二通りあると思います。



過酷な乾燥・半乾燥地域における人々は、居住地の維持の方法として、太古の時代より自然の湧水や大河川などに依存してきた。しかし、水量の減衰・渇水、オアシス人口の増加・食糧増産の必要性などの理由から自然水の量だけでは水不足となり、人工による水資源の開発が必要となる。そこで乾燥地域において arghua (aque・アクア・閼伽・水) を確保する方法として極度な蒸発を防ぐため地上用水路を避け、隧道式地下水取水法であるカナート(qanat・kariz)を開発した。それは、紀元前6世紀ごろペルシアの Zagros 山脈地方で開発されて kantanaiji などと呼称されていたようだが、後にアラブ語の影響を受け qanat/kariz などとペルシア語化され、ペルシアを淵源とした qanat 文化が西方と東方に民族の移動や宗教の伝播と共に伝播・拡大した。その過程で土地環境に呼応した構造や名称に変化し現存している。



上空から見た竖穴の様子
(外観はカルデラ火山に酷似)

◇カナート文化の伝播

Qanat 文化は B. C. 525 年に Achaemenes 朝 Persia が Iran と Mesopotamia を統一し、首都を Persia の Persepolis に置いた頃に、アラビア半島にも渡っているものと考えられる。西方伝播ルートは地中海を挟んで北ルートと、南ルートに分かれる。

分かれる。

西方伝播・地中海南ルートは B. C. 518 年頃に Dareios 大王がエジプトに伝えたときとされている。その後、北アフリカ・マグレブ地方やスペインに広がったものと考えている。地中海北ルートは、B. C. 500 年ペルシャがギリシャ攻略(ペルシャ戦争)した頃から伝播しているのではないかと推考する(委細省略)。

一方、東方伝播ルートは、後漢の班超が A. C. 76 年に西域経営した頃からアフガニスタン・パキスタン・中国などのルートで伝播が始まり、以降韓国や日本に渡ったものと推考する(委細省略)。

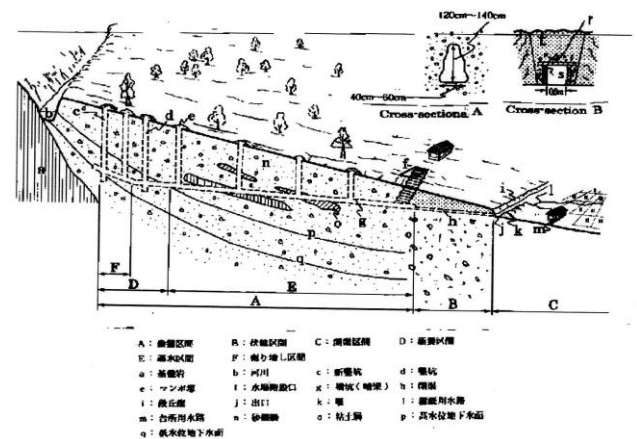
◇カナートの分布



◇カナートとマンボの構造

モグラの穴のように竖抗と、横抗からできている。竖抗の役目は換気・掘削土の排出や工用具の出し入れ・工夫の昇降用。横抗隧道は、カナートでは送水を主とし、マンボは浅層地下水の取水と送水の二つの役割をもっている。

水源は、深い被圧地下水の母井戸(カナート)と浅い不圧地下水(マンボ)から集水する。



鈴鹿山脈東麓斜面におけるマンボの様式図
(高村弘毅原図、日本地理学会・1974 予稿集)

テレビが新聞を超えた日

ニュース革命はこうして始まった 澤雄二会員

1984年10月1日。当時のテレビニュースの常識では、奇想天外な、そして後に、「ニュース革命」と呼ばれた番組の放送が始まった。夕方6時「FNN スーパータイム」の登場である。半年前のある日、報道局長と報道センター編集長に呼ばれた。「何をやってもいい好きにしているから、とにかく、全く違う新しいニュースを創れ」こんな無責任な指示があるだろうか。何日間か、スタッフと飲み歩いた。しかし、これだけ大胆で実は思慮深い上司の決断があったればこそ、これまでのニュースのルールをほとんど無視した、奇跡のような番組が誕生したのだ。



「テレビが新聞を超えた日」とタイトルをつけた。重大なニュースが発生した時“どのメディアの報道を信頼するか”との世論調査では、新聞が70%でテレビが25%であった。3年後、数字が逆転した。テレビ60%、新聞35%、現在はテレビ80%以上となった。スーパータイムが革命を起こしたのである。

最初に悩み、知恵を絞ったのが番組のコンセプトである。それまでのニュースは、当事者の一人として敢て言うのと、一方的で、独善的で、わかりにくかった。それを「茶の間と対話するニュース」に変えると決めたのである。もう一つ大事なコンセプトを掲げた。「ニュースバリューにジャンルはない」である。新聞には、政治・経済・外信・社会

という暗黙の序列が確立されている。テレビもその影を引きずっていた。新しいニュースではこの序列を切り捨てた。視聴者が知りたい、関心の高いニュースを優先させたのである。このコンセプトを実行していく過程では、様々な圧力や問題、批判との葛藤があったことは言を待たない。

茶の間と会話するためには、関心を持ってもらう、興味深く、判りやすく伝えて、見せる工夫が必要である。当時“100のアイデア”を合言葉に新しい工夫を編み出した。それらは、現在放送されているニュースや情報番組のほとんどの手法の原点となっている。

当時の工夫を羅列すると、①世界で初めてキャスターを座りでなく立たせた②記者リポートを多用した③長い原稿はすべてやめて、ミニドキュメントとして作り込んだ④スーパーインポーズをカラー化した⑤デカパネル解説の導入、キャスターがスタジオでパネル説明⑥キャスターコメントの導入⑦音楽の多角的活用、キャスター毎のテーマ、ニュースタイトルにキャッチ音等々⑧スタジオで模型解説⑨スポーツ改革、新コーナーで福原愛や三浦カズを発掘 etc

初代キャスター逸見政孝と幸田シャーマンでスタートしたスーパータイムは他局にも波動を呼び、半年後に、日本テレビがスーパータイム化、1年後に、テレビ朝日がスーパータイムのコピーのような「ニュースステーション」の放送を開始、TBSも2年後にはスーパータイム化し、テレビニュースの革命が進んだ。一度だけ、週間平均視聴率が20%を超えた。夕方のニュース番組では、まだこの記録は破られていない。

鉄道博物館と小江戸川越観光バスツアー

堀内陽二会員

平成27年10月14日(水)聖蹟桜ヶ丘駅前に朝早く(8時集合)16名のメンバーで貸切りバスに乗って、最初の目的地大宮は鉄道博物館に向かって出発、10時過ぎに到着。予約の関係で入館後ただちに模型鉄道ジオラマに入場。大勢の子供たちの団体も一緒に賑やかな観覧でした。

次いでこれも予約のしてあったボランティアガイドによる広大なスペースのヒストリーゾーンで、珍しいまた懐かしい各種車両の数々を、二人のガイドにそれぞれ二組に分かれて約一時間説明を聞きながら回りました。

鉄道マニアならずとも館内には見どころが沢山あり、家族連れなどでじっくり見学されれば丸々一日かけても回りきれないでしょう。今回はほんの一部の駆け足見学でした。

ヒストリーゾーン2階のレストランTDで予約の昼食を済ませ、そこそ次に次なる目的地川越に向けて再びバスに乗り込みました。

まず、川越は江戸の母といわれる所以たる重要文化財川越大師、喜多院へ直行。天長7年(830年)慈覚大師により建立された天台宗の寺院。徳川家とはたいそう縁の深い歴

史のつまった佇まいで、徳川家光誕生の間(客殿)や春日局化粧の間(書院)、これは江戸城紅葉山の別殿を移築したものと。境内の四季を通じての庭園などあるいは五百羅漢と、これまた見どころがいっぱいありました。

そこから最後の目的地川越市観光へとバス移動。小江戸川越の見どころはやはり蔵造りの街並み及び周辺の散策。有名な『時の鐘』も近くに。但し、今回は耐震化工事中でした。ゆっくりじっくりと名物の芋菓子などお土産を買ったり、ちょっとお茶を飲んだり、菓子屋横丁も面白い一角。

最後の集合場所は川越市役所。全員バスに乗り込み帰路につきました。大変お天気にも恵まれ、夕刻には聖蹟桜ヶ丘駅前に無事帰還、解散となりました。



若き日のそれぞれの思い出を秘めた鉄道博物館見学

「争いのない平和な日本・世界を目指して」

平成 27 年 9 月 24 日、多摩市立第二小学校 6 年生(約 150 人)を対象に、当クラブ初代会長蓮池守一さん(現会友)が「多摩地域の戦中・戦後の小学生の状況」と題して講話をされました。その概要を掲載いたします。

文責 中村昭夫会員記

戦時中(昭和 16、7 年)の多摩地域には家屋約 840 戸、人口約 5100 人であり、当時は農業が主体で、他に国の命令で松根油作りや郷土防衛隊用の竹茶碗作りなどの作業が課せられた。子供には出征兵士留守宅の農業手伝い、松根油や竹茶碗づくり、学校農園の仕事も多くあった。今のように子供同志で遊ぶということはあまりなかった。

多摩では空襲はほとんどなかったが、都内や八王子、立川など近隣では空襲に遭い、焼野原となることも多く出た。昭和 18 年頃から都内からの学童疎開の受入れも行われた。小学校は国民学校と名前が変わり、学習内容は「忠君愛国」中心となり、勤労奉仕で農業の手伝いをさせられた。教科は国語・算数・理科などの他修身・武道があり、これに男子には農業、女子には裁縫の授業が課せられた。

朝礼では校長先生の訓話や戦況の話が中心で「欲しがりません。勝つまでは」と徹底抗戦、1 億玉砕を叩き込まれた。

昭和 20 年、戦争は終結したが、300 万人以上の日本人が戦争で亡くなり、国土は空襲で大きく破壊され、食糧、生活物資が不足し、食料を求めて闇市や買出しが普段の生活の中で欠かせなくなった。都会では親を亡くした子供は浮浪児になったり、靴磨きなどして生活費を稼がなくてはならなかった。多摩では幸いに農業が主体で、食糧は自分達が食べる分だけは生産できたが、それでも食料不足は大きな問題であった。

勤勉な日本人は復興にむけて一丸となった努力の結果焼け跡から復興した。昭和 40 年、多摩地域は国によって居住地としてのニュータウン計画が打ち出され、多摩地域の大改造が行われ農村から居住地へと変貌し、人口約 14 万



授業風景

8 千人、世帯数約 7 万の現在の多摩市ができた。

最後に「戦争はやってはいけないということを心掛けて、平和な日本を作っていって欲しい」と述べられた。

□多摩第二小学校 6 年生の感想が寄せられました。

1. 戦時中や戦後は食糧難であったことが分り、現在は満腹に食べられることに幸せだと思ったが、今の日本では食料の三分の一が捨てられていることを知り、まず給食の食べ残しをなくすことから頑張らなければならないと思った。
2. 70 年前の小学生の生活を聞くことができ、今とは全く違う生活であったことを知り、今は幸せだと思った。今の平和な世界を今まで以上に大切にしていってあげたさを感じながら生活をしていきたいと思う。
3. 戦争中の子供たちは遊びなどあまりせず、家の手伝いや学校でも頑張って戦争中の子供たちは偉いと思った。いじめなどなかったことなどから、非常に強い団結力で戦争に勝つことに向かっていたのだと思った。
4. 戦争を体験した人の生の声を聞いてよかったと思う。戦争中は大人・子供関係なく国のために、勝つために働いていることに胸を打たれた。今の私たちは好きなものを食べ、欲しいものを当たり前のように買っている。昔と比べ本当に幸せだと感じる。もっと戦争について知りたいと思うし、日本人として先の戦争に関心を持ち、戦争を知る機会を求めるときと思った。

私の一句

酌み交す竹筒の酒落葉焚き	下田行の車窓すれすれ花芒	吾亦紅風のままなる四分音付	芋煮会山形発の全国区	爽籟や花ごとく揺らし来る	水澄んでますます白し絹豆腐	ついに来たゴルフ日和の鱗雲	降りつづく秋雨の中パラ赤く	明日の夜を期待して寝る雨月かな	鶏小屋の鳴き声陰し野分立つ	天高く畦遠さがる里神楽	誘われし香りの主は大樹茉莉花	蝉しぐれ七十年の平和告ぐ	雲の峰抜けて目にいる青き海	絵巻事ならべるふたり雲の峰
池田 玄海	蓮池 光花	倉貫野志水	西村 雲海	登坂 爽風	鈴木 透水	川久保魚水	滝川 露枝	北村 岳人	蓮池 秋霜	阪東 浮草	藤喜百目紅	岡野 流馬	神谷 虎子	増山胡桃子

「聖蹟桜ヶ丘周辺まち歩き」 登坂征一郎会員

9月26日、多摩市役所経済観光課主催、「せいせき観光まちづくり会議」受託の掲題の「まち歩き」が催された。これは二つのコンセプトからなり、一つは若者に人気のアニメ「耳をすませば」のロケ地となった聖蹟桜ヶ丘駅からいろは坂を上り桜ヶ丘のロータリー交差点のコースと、もう一つは自然が残る原峰公園を抜けて熊野神社から旧鎌倉街道に点在する歴史遺跡を巡るもので、新旧対象著しい興味深いものであった。市の宮崎課長以下多数のスタッフがガイドに携わり、また「まちづくり会議」の山田さんの熱の入ったガイドにも、この企画の並々ならぬ意気込みが伺えた。

当クラブの7名(稲田興・岡野一馬・大澤亘・鈴木達夫・西村政晃・増山敏夫各会員と筆者)を含め30名が参加した。

□「まち歩き」の前半は、聖蹟桜ヶ丘駅西口のアニメ「耳をすませば」のロケ地を表す案内板「聖蹟桜ヶ丘散策マップ」「青春のポスト」前から始まる。いろは坂桜公園から駅周辺を眺め、松風を耳にしているは坂の階段を上る。坂上の金刀比羅宮にお参り、天守台跡からニュータウン方面を見渡す。環状交差点都第1号の桜ヶ丘のロータリーに至る。



青春のポスト

□アニメの主人公月島雫は、読書好きで図書館に通う。借出す本の図書カードにはことごとく記入された天沢聖司の名に気づく。互いが気になりロマンが芽生えるが、雫は

金刀比羅宮で思わぬ男子から告白を受ける。今ではこれがきっかけで参拝に訪れる若者が増え、恋おみくじが新たに設置され人気とか。ロータリーにある聖司の祖父の店アンティークショップ地球屋を舞台に物語はさらに進展する…。□ロータリー脇の喫茶店「ノア」で休憩、ここは「耳をすませば」ファンの溜まり場とか。コーヒーとスペイン風菓子桜ぼるぼろんが供され、口中でサクッと溶けて一息つく。□後半は自然が息づく原峰公園に入る。木間越しに多摩の農村の原風景の稲田がのぞく。熊野神社に下り立つ。熊野神社は延徳元年(1489年)に創建され、和歌山の熊野三社の祭神を分霊して祭ったといわれている。この境内にある霞ノ関南木戸柵跡は鎌倉北辺の防備に建暦3年(1213年)に設置され、新拾遺和歌集など歌にも詠われているとのこと。



旧鎌倉街道の道幅を示すという灯笼

旧鎌倉街道沿いには、元弘3年(1333年)の関戸の合戦で鎌倉幕府軍北条泰家の危機を身を挺して守った横溝八郎・阿保入道の墓、市内最古の庚申塔、江戸時代の調布玉川惣画図で名高い多摩の文化人相沢父子五流・伴主の墓がある観音寺などを巡り、最後は大水で川原に流れ着いたご神体を祭った九頭竜神社を経て出発地点に……。

□後半の案内は、かつて当クラブで縄文時代について講演を賜った市の山崎和巳様あたり、多摩の史跡、文化財のご造詣の深さに改めて感銘を受けた「まち歩き」でした。

1.コーラスを楽しむ 中村昭夫・堀内陽二会員

多摩市では毎年7月、「多摩市合唱祭」が開催され60近い合唱団が参加している。女声合唱、混声合唱、男声合唱それぞれにハーモニーの特徴があり、自分の好みに合った合唱団に所属して合唱を楽しんでいる。



多摩ダンディーズ
永山フェスティバル2015

中村会員は、多摩市の中で最も古い歴史をもち43年のキャリアを誇る「多摩男声合唱団」(多摩男)に所属し、2年に一回の定期演奏会のほか、多摩市合唱祭、三多摩合唱祭、各所から招かれての演奏活動を行っている。また、多摩男メンバー4人による多摩ダンディーズとしても活躍している。



コール有朋
永山フェスティバル2015

混声合唱団は多摩市には沢山あるが、堀内会員ご夫妻の所属する「コール有朋」は、指揮が島田恵美子氏、そのご夫君の島田政雄氏が代表で50名を超える団員からなり、保健所や老人保健施設等への慰問コンサートを年数回、永山フェスティバルには毎年出演している。長年のコーラスボランティア活動に対し多摩市より、平成21年には市民表彰を受けた。

2.日本伝統文化の継承

吉岡喜久恵会員：9月26日、パルテノン多摩で開かれた「多摩市長寿を共に祝う会」で、「貝合わせ」を指導した。

小西加葉子会員：10月4日、護国寺秋季煎茶会において艸庵庵の席主を務め、ほうじ茶による振る舞いをした。

阪東熙子会員：10月13日、中野区のシルバースティ哲学堂で、日本のしきたり、秋の雛、菊慈童の解説をした。

森川静子会員：10月16日、明治神宮献茶に参列、水沓を履き点目台の御茶を本殿に捧げる。禰宜の姿を間近で見、その後昭憲皇太后のおしるし「桃」の針隠しがある桃林荘にて濃茶薄茶を拝服した。

滝川道子会員は、江戸しぐさ伝承普及員として活躍、青木ひとみ会員は、日本舞踊の指導・普及に務めている。

干支記念旅行

瀬尾日出男会員

今年の夏は、以前から計画の六度目の干支を迎え、記念の思い出にと、7月28日、成田より全日空直行便で12時間30分フライト、仏シャルルドゴール空港着の4か国9日間のツアーに夫婦で参加、パリ、スイス、リヒテンシュアタイン、ドイツの名所を巡るコースを楽しんできました。久しぶりのヨーロッパ旅行に気分も高揚、楽しみました。実は私、約40年程前に英国のドーヴァーよりフェリーに乗り、文字通りのドーヴァーの白い壁(ホワイト・クリフ)を右手にドーヴァー(英仏)海峡を渡り、対岸の仏カレー(現在はユーロトンネル)に着き、フランス、ドイツ、スイス、オーストリア、イタリア等の国々を回り、慌ただしく夏休みを送った記憶がある。当時は、行く先々の貨幣の呼称が異なり、ポンド・フラン・マルク・リラ等の交換に悩み笑いましたことが懐かしく、その点今はユーロで統一され、買い物、食事ができることで便利になった。

海外旅行してみると、どの地域、場所でも写真映りの適した建物の素晴らしさをつくづく感じました。特に、整然として変化に富み荘厳さを誇る建物の見事さは、興味のある人達にはたまらない魅力と言えるでしょう。

ルイ王朝時代の象徴ヴェルサイユ宮殿、モナリザ、ミロのビーナスを始めとした美術、絵画・工芸の宝庫ルーブル美術館見学では、時の経つのを忘れる興奮を味わいました。また、ゴシック建築のケルン大聖堂、最近人気を集めているモンサンミッシェル(今は道続き)修道院などを間近に観ることができて感激しました。

旅行後半のスイスアルプス地方では、ハイライトの一つでもあるユングフラウ山岳鉄道に乗り、インターラーケンより、グリーンデルワルド経由ユングフラウヨッホ駅より、スフィンクス展望台からアレッチ氷河を見物、自分としては、氷河の規模が以前と比べ、多少小さく感じたが、このことは地球温暖化の影響を受けているかもしれない。

残念なことは、天候により、メンヒ、アイガーの雄姿を観ることができなかったことである。

海外旅行は楽しいことですが、長期旅行は心身とも丈夫なうちに遠出するものだと、今回の旅行で痛感しました。



適した建物の素晴らしさをつくづく感じました。特に、整然として変化に富み荘厳さを誇る建物の見事さは、興味のある人達にはたまらない魅力と言えるでしょう。



私の寄り道

阪東熙子会員



この齢になって今年7月に、京都造形芸術大学 東京外苑キャンパス芸術学舎の受講生となった。そのきっかけは、アルバム整理中に、昭和60年2月に参学した京都民芸大学茶道学会に東京から泊りがけで行った58歳の写真だ。その時の会場は相国寺山内 大光明寺で、錚々たる文人墨客茶人、学者の集まりの格の高さに連日緊張したのを思い出す。ただ、最終日は大河内山荘での会食があり、やっとな講師の方と直接会話ができて嬉しかったのを憶えている。

スナップ写真を見ると、髪の毛黒々と多く、少しだけ今より細そうに見える?今回は、偶然同じような講座を見つけ、入学金なし、単位も取れるとあり即申し込んでしまった。内容はユネスコ無形文化遺産に登録されている「和食と行事食」といい、演習を伴う講座で茶道とも関わり深く、習知の事項もあったが、初耳の項も多く有意義だった。

講座はさておき、今期の学生の中で、私が最年長らしく、入り口では学生証を示すと必ず職員が教室まで付いてくる。髪は白いし背中丸いし、気遣いはありがたいが私は戸惑った。因みに、学舎の受講生の年齢構成は、30代21%、40代23%、50代19%、60代19%、70代8%、80代はいないらしい。

講座はさておき、今期の学生の中で、私が最年長らしく、入り口では学生証を示すと必ず職員が教室まで付いてくる。髪は白いし背中丸いし、気遣いはありがたいが私は戸惑った。因みに、学舎の受講生の年齢構成は、30代21%、40代23%、50代19%、60代19%、70代8%、80代はいないらしい。

受講中、私はノートに初耳の項と共に、次々浮かぶざれごとくもメモし楽しんだ。意に添わない感もあるが一部を示す。

- 受講証 下げて嬉しく校内巡り
若者背高 見上げる私背を伸ばす
- イヤホンし 顔だけ正面 ながら族
空ろな眼差し 無表情
- メモ取らずスマホでカシャリ 当世風
後で見るやら 見ないやら
- 話すより 聞く側気楽 自由席
せめてうなずき ジェスチャー送る
- 単位より見聞体験 身の肥やし
何時か 何処かで役に立つ
- キャンパスの 廊下歩いてお辞儀され
まさか 生徒と思われてない
- 受講終え 豊かな時空 身に満ちて
朋友の増え 雑学の増え

帰去来辞の如く「心遠ければ 地も自ずから偏なり」を実感できた今回の受講は、貴重な日々でした。

◇◇◇ わが故郷 ◇◇◇

郷里の片隅で

増山敏夫会員

私の郷里は父の実家がある富山、小学校の5年余を過ごした。戦争の故である。実家は中心商店街で代々漆器・和家具商を営む老舗だった。戦中戦後、嬉天下の国富山の三女傑と言われた祖母が店を取り仕切り大きな信用を築いた。叔父、弟と代を重ね、今従弟が継いでいる。当時は塗師や箆箆職人が店奥の仕事場に居り、棧積み天日干しの桐板を鋸、鉋、鑿を操って箱組み、藁を束ねて切揃えた道具で木目立てを行い、蟻引をする。最後に引き出しを出し入れして、他の引き出しの出具合を確かめて一本のタンスに仕上げる。私はこうした「物づくり」を飽きずに眺めた。東京へ戻ってから休みの度に祖母のいる郷里へ帰った。いま実家の店がある商店街は地方都市の多くがそうであるように元気がない。私がよく訪れるのは富山の片隅の八尾である。

20年前、国産材家づくりの運動をやった折、指南役だった宮大工が富山に出来た伝統大工養成の学校の大棟梁として招請され、私も若干のお手伝いするようになった。この学校で教える八尾の棟梁に「風の盆」に招かれたのが八尾との縁。八尾は富山平野を見下す立山連峰の裾野に位置し、神通川の支流・井田川沿いの尾根筋に集落を形成している。元は富山県八尾町だったが、今は富山市。今や立山山頂まで富山市である。いつも風が流れ、江戸時代建立の聞名寺の門前町、蚕の種紙の産地として栄えた。伝統的な格子の町並みが残る坂の町である。

昨年この古い町並みの真ん中に、周囲の伝統的な格子の町並みと付き合うことが求められる一軒の町屋を設計する機会をいただき、度々この町を訪れている。伝統的町屋の住まいの工夫を多々学んだ。建築は風土に根ざすものである。先日たまたま解体中の古い町屋を覗いた。間口一間半、奥行はその10倍以上、建具がなくなった柱と梁のがらんどうの中程に小さな空が見える。坪庭があった！風の流れをつくり光を採る工夫である。冬は屋根の雪溜めにもなる。こんな知恵が随所に隠れている。

一年越しの設計がまとまり着工した。匠は以前、同じ施主の東京の家を建てた八尾の棟梁達である。手刻みの太い柱梁を釘や金物を使わずに組む伝統工芸を用い、柱梁にはこの地方の民家と同じ弁柄と拭き漆をぬる。もう一つ拘った事がある。重機で撤去処分寸前の1936年竣工の書院(東京)の建具一式を貰い受けて再利用した。古来日本建築では移築、リユースは珍しい事ではなかった。先日、建物の後ろ半分の漆塗の骨組みが八尾の空に立ち上がった。来年の風の盆が楽しみである。

八尾は風の盆も良いが、普段の静かな坂の町を耳を澄まして歩くのも良いものである。

「風の盆」とは：二百十日の無事を祈り、9月1日から3日間夜を徹して行われ、町筋を流し、三味線、胡弓、太鼓の伴奏で「おわら節」を唄い踊る祭り。

◇◇◇ ハッピーバースデー ◇◇◇

9月誕生日を迎えられました！



左から
増山敏夫
鈴木達夫
秋山正仁
登坂征一郎
の各会員

10月誕生日を迎えられました！



左から
藤崎喬子
中村昭夫
の各会員

◇◇◇ 編集後記 ◇◇◇

○猛暑であった今年の夏も過ぎ、ようやく秋らしくなってきた今日この頃、皆様の活動もますます活発になっていくことでしょう。

○今年は戦争終結から70年が過ぎました。戦争体験者は次第に数少なくなっていく中で、戦争経験を語り継いでいくという最も大切なことを忘れてはなりません。9月に蓮池守一元会長が多摩第二小学校6年生全員を対象として「多摩地域の戦中・戦後の小学生の状況」というテーマでお話され、生徒達に深い感銘を与えられました。

太平洋戦争は、日本の歴史において最も重要で大きな出来事でした。この事実をシッカリと身に付け二度と戦争を起こさない国にしていくことに国民は労力を惜しむべきではありません。

○高村弘毅会員、澤雄二会員の卓話は夫々の専門分野の紹介、また各会員による旅行・ふるさと探訪・趣味の紹介の寄稿など大変面白く興味がある内容でした。私達のニュースは益々内容が豊富になっており、これは会員各位の活動の幅広さ、豊かさを物語るものです。

(広報委員 中村昭夫記)

◆◆訂正のお願い◆◆

既発行の本紙第62号5ページ「グルメサークル」で「宇治川」を「大阪の長柄川」と訂正させていただきます。